

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集  
第 56 集 (2023年度) 2023年 7月発行 : 103-106

## 今はじめて書く思い出

黒 羽 亮 一



## 今はじめて書く思い出

黒羽 亮 一\*

依頼に応じて、きちんとしたものを書いておいた方がいいと思い、書齋で古いものを探していたら貴センターが92（平成4、以下もこのように西暦の初め二桁を省略）年に発行した「20年の歩み」が出て来た。そこには「私と大教センター—思い出と期待—」として外部の十七人が寄稿しているが、私も「71～81年客員研究員、現在は学位授与機構教授・審査研究部長」と紹介され、私も一人になっている。

その書きだしには——日本経済新聞（東京）の編集局社会部長をしていた73年ごろ、横尾壮英教授と喜多村和之助教授が突然新聞社に見えた。大会社や国の機関のトップが交代したときには新聞社に挨拶に見える慣行はあるが、東京の大学要人はこういうことを苦手というか、はしたないと思うのか通常なさらない。おそらく国会図書館にいた喜多村さんのアイデアだったのだろう——と書いている。

その二年後私は編集委員兼論説委員に変わった。社会部長の前にいた文部省記者会時代に知り合った天城勲さんなど教育行政の専門家を回っていた。喜多村氏も熱を入れていた IDE（民主教育協会）を拠点にしていた。

昭50（75）年、秋、センターが安芸の宮島の奥まったところの県の施設を借りて開いた「大学における教育機能を考える」というセミナーで講演するように頼まれて、はり切って出かけた。同時に客員研究員の一人に任命されて、センターの行事には旅費・日当が儲えるようになった。

それから、三年ほどした78（昭53）年の秋と覚えている。横尾先生から、文部省の南隣りの国立教育会館（いまはなく職員などの昼休みの広場になっている）の談話室に呼ばれて、「広島に来ないか、研究専従だから当面は週に半分ぐらい来て、あとは東京で仕事をしていてもよい」と言われた。そのときは日経の論説委員を止める気持はないのでお断りした。

後日わかったことだが、横尾先生は私の仕事ぶりだけでなく、身許しらべもされていたようだった。私が旧制東大西洋史学科学生のころ、同学科に青山吉信という人がいた。彼は昭和18か19年に広島高師を出て、教員生活数年のち東京に来た。61年日本女子大文学部に正式に大学設置基準に基づいた史学科ができるときその初代専任教授になった。つまり「教養の歴史の先生ではない」という意味で、一流学者だった。行政力などにも長けていて、日本女子大の定年後も理事をしばらく続けていたという。ご承知のように横尾先生の専門は欧州大学史、しかも広島高師では同級らしかった。この件は私が直接聞いたわけではなく、回りの人の話を綜合したものだが、まちがいなかろう。

---

\* 大学評価・学位授与機構名誉教授

広島行きの話は、これで終りになったのではない。昭59(84)年、夏、今度は新堀通也先生から、IDEの仕事をよく一緒にしていた阿部美哉(最後は国学院大学長)という人を通じて、むし返された。このときは日経の定年も近かったので触手が動いた。しかし筑波の話も起きそうな気配だったし、対抗馬といわれる人は私が間接によく聞いていた人でもあったので遠慮した。

はじめに戻すと、今回もう一冊「大学改革と高等教育研究の新体制」と題する「93年度研究員集会の記録」がでてきた。ここでは有本章と私がシンポジウムの司会者で報告も行ない、パネリストには坂元昂、喜多村和之(放送教育開発センター)、山本眞一(筑波大学)ら五人がなっている。山本氏は文部官僚だが、埼玉大助教授から筑波大のセンターで私の後任になり、喜多村氏は広島大を辞めて東京に帰っていたのである。奥付を見ると「中区千田町」とあり、現在に移る最後のころだったのではないか。

それから後の印刷物は拙宅にはない。その年に、筑波に。学位授与機構・(私立)常磐大学(水戸)と移って「大学教授業」も終わった。それでセンターの方に「紀要などはもったいないから」と連絡して寄贈を遠慮した。

それからでも二十余年。94歳になったが執筆のご依頼に間に合いそうだ。幸せな人間である。